

兵庫県から見た第1回国民体育大会（1946年） －開催準備、競技開催実態、参加者の評価の検討から－

秋元 忍（神戸大学）、島津 大地（兵庫県スポーツ協会）

はじめに

兵庫県はこれまで計6回の国民体育大会（以下、国体）を開催してきた。本研究は、このうち広域開催となった1946年第1回国体が、兵庫県においていかに開催されたのかを検討することを目的とした。

国体史や戦後スポーツの通史においては、第1回国体の創設過程に関する研究はあるものの、各地域での開催準備や実態に焦点を当てた研究は見られず、史料の発掘も十分ではない。そこで本研究では、近年利用可能となった関西準備委員会および兵庫県地区準備委員会の報告書、競技プログラム等の新史料に依拠し、第1回国体について、兵庫県における開催準備、競技開催実態、参加者の評価の3点から再構成し、兵庫県から見た第1回国体開催の意味を考察することを課題とした。

1. 兵庫県における開催準備

第1回国体は、戦後日本の再建とスポーツ界再編を目的に、1946年2月、大日本体育会により構想された。近畿圏での開催は、理事長の清瀬三郎が関西の重鎮・春日弘に依頼したことで進展し、同年7月に関西および各府県の準備委員会が発足した。

兵庫県準備委員会には、委員長の県教育民生部長をはじめ行政関係者が多く名を連ね、官民一体の体制が取られた。具体的な準備は、極めて困難な社会情勢下で行われ、輸送を京阪神急行電車へ一任したほか、宝塚での宿舍確保、警察と連携した食糧・燃料の配給交渉などが展開された。また、西宮球場に本部を置き、情報伝達体制の整備も図られた。

2. 兵庫県における競技開催実態

第1回国体において、兵庫県は近隣府県と比較しても最も多くの競技を開催した地域であった。夏季大会（8月9日～11日）では、宝塚プールにて水泳が開催された。日本選手権を兼ね、男子100m自由形などのレースが行われた。秋季大会（11月1日～3日）では、以下の11競技が県内4会場で実施された。西宮球場：拳闘、野球。また、大会本部が置かれ「本部開会式」も挙行された。西宮球技場：送球、ラグビー、ホッケー、米式蹴球、蹴球。西宮体育館・屋外コート：バスケットボール、排球、レスリン

グ。宝塚公会堂：卓球。

3. 参加者の評価

当時の参加者の証言からは、物資不足や交通の混乱を乗り越えて国体に参加しようとする熱意が伝わる。水泳：古橋廣之進は、満員列車でのキセル乗車や野宿、飯盒でのいもがゆ作りを経験しながら一週間かけて宝塚に到着した。松尾煌一によれば、役員不足のため会場に来た者がその場で計時員を任されるような状況だった。開会式・送球：神田清は、戦後らしい簡素な開会式に「新生日本の佳き日」を感じたと振り返る。選手は毛布や食糧を持参し、役員は闇市場でスルメ等を買って遠来の客を慰労した。楠智子は、手作りのユニフォームでコートを走った喜びを「敗戦という事実もどこかにふっとんだ」と述懐している。サッカー：山路修は、空襲で亡くなった仲間を思いながら、準優勝に終わった悔しさを綴った。

おわりに

先行研究には、第1回国体を単に「京都国体」と略記する例もみられるが、兵庫県における開催実態と、参加者にもたらした多様な経験を踏まえれば、第1回国体の開催と、戦後日本のスポーツ復興に兵庫県が果たした役割は、これまで認識されていた以上に大きなものであった可能性がある。また、本大会は「民間人の手だけで行われた」と回顧されることもあるが、兵庫県における開催準備に関する史料には、競技団体関係者と共に、行政関係者の名前も多く含まれていた。よって、都道府県単独開催となる第2回国体以降ほどの影響は及ぶことはなかったにせよ、第1回国体においても、民間のスポーツ愛好者の熱意と共に、行政の支援もまた、県内開催を確かなものにするためには不可欠であったと言える。